中日新聞　（第3種郵便物認可）

愛・地球博プロローグ

われら地球人

長いようで短くて、短いようで長い日々。愛・地球博（愛知万博）もいよいよ大詰めだ。環境をメーンテーマに掲げた万博という体験を経て、〝われら〟は〝地球人〟となりえたか。広報プロデューサーとして3年半、愛・地球博の表裏、泣き笑いに寄り添ってきたマリ・クリスティーヌさんが、振り返る。（飯尾　歩）

愛・地球博広報プロデューサー

マリ・クリスティーヌさん

日本生まれ。ドイツ、米国、イラン、タイなどの生活を体験。芸能活動を経て国際ボランティアとして精力的に活躍。〇〇年には、国連人間居住計画親善大使。〇二年二月から現職。

結ばれたきずなが遺産

口元に少し痛みが残る。百八十数日間、笑顔と言葉を絶やさずにいたからだ。大変な日々だった。でも、その一日一日に今、感謝の気持ちでいっぱいだ。

「自然の叡智〟という、少し分かりづらいものを大勢の方に知っていただくには、自らストーリーテラー（語り部）になるしかない。私自身が語り続けるしかないんです」

〝複雑系の万博〟だった。

「例えば、万博＝月の石と、万博＝マンモスという単純系で自然の叡智は語れない。あの国は、こう、あの文化は、こうなんだと割り切ることも難しい。このことがむしろ二十一世紀という時代を象徴しています。私たちは、本当にいろいろなことを考えなくてはならない時代を生きている。愛・地球博は、そんな時代を生き抜くために開かれたんだと思います」

「その中で、一番明確な目標といえば、地球をどうやって大切にしていくのかという問題です。でも、そのやり方は〝百人百色〟。企業ならCSR（社会的責任）、地球に負荷をかけないものづくり、リサイクル。政府なら政策づくり。そして市民には市民の役割が。決して別々のものじゃない。全部合わさって一つになるものなんです」

愛・地球博は、「環境」という複雑系の難問を、「地球大交流」の補助線を引くことで、解決に一歩近づけたと考える。

「難問の答えを出すには、世界がどうやって仲良くするか隣の国とどうやって仲良くするかが、もう仲が良いとは言えません。アルメニアの大統領が見えたとき、もう一つのグルジアのコーナーは見られても、アゼルバイジャンの方には行かれないと聞いていました。でも縄張りの向こうに詰めかけたアゼルバイジャンの皆さんと目が合うと、大統領はすうっとそっちへ入って行っちゃうわけですよ。ああ、これが愛・地球博なんだって―」

目の前で、音もなく〝国境〟が消え去った。

「人間同士がきちんと交流できる環境をつくり出せれば、世界は平和になる。世界の平和こそ、環境を守り、地球を守る答えじゃないですか」

史上初めて「市民参加」を掲げた万博で、市民も大いに語ってくれた。

「当初反対運動があったから、市民は大いに語り始めた。そしてお互いの言葉に耳を傾け合って、ステークホルダー（利害関係者）として心構は、整い始めているようだ。でもこれで終わりじゃない。自ら答えを確かめたい。

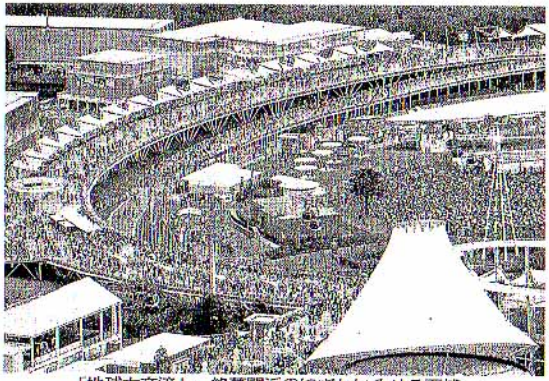
「私、本気で名古屋に引っ越して来ようと思っているの」

象徴的な光景が、脳裏から離れない。

「コーカサス共同館の中に同居するアルメニアとアゼルバイジャンは、歴史的にあまのすごく重要なことになると思うんですね」

を一つにしていった。大切なもの、例えば海上の森をどうやって守っていくか、守るためには何をしなければならないか、このように問題を共有し始めた。そんな市民の変化を博覧会協会も受け止めた。愛・地球博が築いた最大の遺産、それは、永遠に消えない人と人とのきずなかな」

〝複雑系〟の難問に挑む裾



「地球大交流」。終幕間近のにぎわいみせる万博＝愛知万博長久手会場で。本社ヘリ「わかづる」から

Think Globally, Act Locally